



TITLE:

SCT-Bの信頼性とパーソナリティ 特性の一貫性についての一考察

AUTHOR(S):

小林, 哲郎

CITATION:

小林, 哲郎. SCT-Bの信頼性とパーソナリティ特性の一貫性についての一考察. 京都大学カウンセリングセンター紀要 2005, 34: 1-8: 30035.

ISSUE DATE:

2005-03

URL:

<https://doi.org/10.14989/156328>

RIGHT:

SCT-Bの信頼性とパーソナリティ特性の一貫性についての一考察

小 林 哲 郎

1. はじめに

SCT-Bは、書きかけの文章を一度完成させた後に、折り込んだ紙を広げると「が」という文字が印刷されており、それに続けてもう一文書いてもらう課題のテストである。「が」の前後の変化を中心に14の反応パターンに分けてみると、それぞれのパターンは、パーソナリティ特性と関連することが考えられる。パターンは<肯定否定>、<肯定肯定>、<否定否定>、<例外>、<受容>、<拒絶>、<理想現実>、<期待不安>、<過去現在>、<希望>、<不安>、<決意>、<自己>、<説明>である。

このSCT-Bをパーソナリティ・テストと位置づけるためには信頼性、妥当性の検討が必要となる。本論では、小林（2005）で検討されたSCT-Bの信頼性についての研究の内、再検査信頼性の研究を公表するとともに、パターン毎に相関係数が異なることの意味について考察を加えることとする。

2. パーソナリティ・テストにおける信頼性

パーソナリティ・テストの得点は、実施する時と場所により、実施者により、非客観検査であれば評定する人により多少変わることはあるだろう。しかし、ある程度一貫性がなければ、パーソナリティ・テストとしての信頼性が損なわれることになる。検査得点が妥当であると判断できるためには、検査者が納得できる程度の信頼性が必要となるであろう。

一般に、信頼性の評価の方法には、平行信頼性、再検査信頼性のように同一被検者に二度実施するものもあるし、1形式のものを1度だけ実施した結果から評価する、折半法、 α 係数などがある。また、評定者の信頼性としては、客観検査では問題にならないが、非客観検査では評定の一致度が保証されなければならない。

SCT-Bの評定は、各反応をパターンに分けて評定し、そのパーセント得点を標準得点化する。これは、反応は文章であるがロールシャッハテストと同じようなカテゴリー化の評定であり、カテゴリー化の際に主観が入る余地がある。したがって、信頼性については十分に検討しておく必要がある。ここでは、SCT-Bの反応パターンについて、評定者間の評定の一致率とSCT-Bの再検査信頼性について検討してみる。

3. 評定者間の評定の一致率について*1

1) 目 的

SCT-Bの各刺激文に対する反応は原則的に、14の反応パターンに評定される。その際、単独または二つの組み合わせで評定することにしてあるので、単独の場合には2点、組み合わせの場合には各パターンに1点ずつが与えられる。各パターン合計点はすべての反応パターン合計に対するパーセントで得点化された上で、角変換されたものを標準得点としている。

この評定の基準は、小林（2005）に詳述されているが、実際にテストとしての信頼性を得るためには、誰でもその基準を理解して同じデータについての評定が一致しなくてはならない。また、評定の一致が得られにくい場合は、その要因についての検討がなされマニュアルを改訂する必要がある。

以上の点をふまえ、本研究では、評定者間の評定の一致率の検討を行うことを目的とする。

2) 方 法

2人の評定者（大学院で臨床心理学を専攻する男女各1名）に20人分のSCT-Bのデータと評定基準を解説したマニュアル（「SCT-Bの評定について」；小林哲郎 1985）を渡して、各データの評定をしてもらった。

その評定と筆者の評定を比較し、評定の一致率を算出した（組み合わせ評定は2つとも一致した場合に一致とみなす）。

3) 結果と考察

評定の一致率は以下ようになった。

男性評定者の評定との一致率 = 71.01%

女性評定者の評定との一致率 = 76.73%

二人の評定者の評定との一致率 = 73.94%

Loevingerら（1970）が発達段階の評定のために開発したSCT（WUSCT）では、36項目のそれぞれを段階評定し、それらを総合評定して被検者の発達段階を9段階に評定している。その中で、12～70歳の女性543名のデータを2名の熟練した評定者に評定をさせて、評定者間の評定の一致率について検討している。その結果、各36項目についての段階評定で、両評定者間の評定の一致率は60～86%に分布しており、中央値は77%であった。

SCT-Bは25項目であるが、14パターンへの評定であり、まずまずの数値が得られたので、筆者の評定基準は信頼できるものといえよう。しかし、各評定者の評定と筆者の考えていた評定を比較してみると、微妙な判断基準がずれていて、同じ様な不一致をみるが多かった。そこで、筆者の評定基準では誤解されやすい箇所、あるいは筆者が厳密に定義していない評定上の微妙なニュアンスについて、マニュアルの改訂に活かしていく必要があるだろう。小林（2005）が現段階での最終マニュアルとなるが、今後も必要な改訂を加えていくつもりである。

4. 再検査信頼性について

1) 目的

SCT-Bを同一被検者に一定間隔を置いて二度実施し、そのパターン得点の一致度を検討することによって、パターン得点の信頼性を検討することを目的とする。

2) 方法

被検者

大学生57名（男性23、女性34）を調査の対象とした。年齢19-23歳。

手続き

1ヶ月の間隔を置いて、講義時間を利用してSCT-Bを2回実施した。1回目も2回目も指示は標準的なものを与えた。2回ともテストを受けて、データのそろっていた被検者は57名であった。

3) 結果と考察

2回のSCT-Bについて筆者が評定し、各反応パターンの標準得点が算出された。そして、その各パターン毎に、1回目と2回目の得点の相関係数（ r ）をピアソンの相関で算出した。このようにして2回のテストの14パターンの相関係数を出したが、相関係数は正規分布をしないので直接平均は出せない。したがって、岩原信九郎（1980）による相関係数の平均（推定値）の求め方によって相関係数の推定値を出すことにした。

その計算法は、まずそれぞれの相関係数をZ変換し、自由度とZ値との積を出す。14パターンの合計を14の自由度の合計で除した数値が、母相関係数の推定値になるという。

$$\bar{Z} = \frac{\sum fz}{\sum f}$$

表1 相関係数の平均値の算出

	肯 否	肯 肯	否 否	例 外	受 容	拒 絶	理 現	期 不	過 現	希 望	不 安	決 意	自 己	説 明
相関係数	0.58	0.41	0.52	0.58	0.50	0.48	0.32	0.47	0.38	0.48	0.48	0.80	0.57	0.60
自由度 f	55	55	55	55	55	55	55	55	55	55	55	55	55	55
Z値	0.66	0.44	0.58	0.66	0.55	0.52	0.33	0.51	0.40	0.52	0.52	1.10	0.65	0.69
fz	36.5	24.0	31.7	36.5	30.2	28.8	18.3	28.1	22	28.8	28.8	60.5	35.6	38.1

*2 数値は小数点以下2桁に丸めてある。

$$\bar{Z} = \frac{447.65}{770} = 0.581$$

このZ値をふたたび変換表を使って相関係数に変換すると $r=0.52$ （ $p<0.001$ ）となり、0.1パーセント水準で有意な相関があることがわかった。

Loevingerら（1970）が発達段階の評定のために開発したWUSCTについてRedmore &

Waldman (1975) が再検査信頼性の研究をしている。WUSCTでは36のSCTの記述から発達段階をそれぞれ評定し、その合計から被験者の発達段階を評定するというものである。WUSCTでは、記述の仕方や内容が変化してもほぼ同じような段階点が得られると思われるが、大学生26名の段階値合計点で、再テスト信頼性は $r=0.64$ であった。それと比較しても人数が多く0.1パーセントレベルでの相関値が得られているので、SCT-Bは同一被検者にはある程度一貫した反応パターンを出すと考えていいものと思われる。

また、Redmore & Waldman (1975) の研究の中で、間隔が短いと動機づけが落ちる可能性が示唆されたので、本研究では1ヶ月の間隔を開けたが、それでも、0.1パーセント水準での高い相関が出たことは、被検者毎の各パターン得点にはかなりの一貫性があるものと考えられることができる。

また、各パターン得点毎に見ると、0.4から0.6の間の数値が多いが、＜理想現実＞の0.32、＜過去現在＞の0.38が低い傾向にある。＜理想現実＞はいくつかの条件を満たさなくてはならないし、優先順位が最後から2番目になるので、評定されにくくなることが考えられる。また、＜過去現在＞は過去と現在の違いに言及するものだが、出現しやすい項目が限られており、どちらかの回では使っても他の回では使わないということが起こりやすいものと考えられる。

一方、相関の高い方では、＜決意＞が0.8と極端に高い相関係数を示している。＜決意＞は、後半で「――ねばならない」、「――すべき」というように自分で状況を打開しようという意志を表現したものであり、評定の基準として、＜希望＞の他力本願に対して自力本願のパターンと筆者は呼んでいる。これは、理想の追求とか良心の禁止という精神分析でいう超自我の働きとの関連するパターンである。したがって、強迫性、完全主義、抑うつ性などとの関連を考えることもできる。この点について以下に考察を加える。

5. ＜決意＞のパターンと病前性格

＜決意＞を含めSCT-Bのパターンの性質はいろいろな心理検査との相関研究などから、明らかになってきている。それらのデータや躁鬱病の病前性格論などの研究を参照しながら、＜決意＞の再検査での相関の高さについて検討してみる。

まず、＜決意＞のパターンを詳細に説明する。＜決意＞は後半部に、将来に向けて自分の努力で解決を目指そうという努力、意志が示されているもの。あるいは、原則とか理想の強調などもこのパターンに入れる。

DT-1 決意、意志、目標^{*3}

例) 仕事 は大変だ が これから働かないといけない

例) 恋愛 には縁がない が 頑張ろう

DT-2 理想追求、原則

例) 女 は強い が 優しくあるべきだ

＜決意＞と同じように後半で将来の変化を望む表現である＜希望＞は特定の状況に変化することを望んだり、それを避けたいと望むことである。ただ、そのための努力の意志がはっきりせず、他者に依存したり、自然の変化を期待するものである。たとえば、弁別のための二つの例文を示す。

例) 私の健康 よくない が 直りたい (＜希望＞)

例) 私の健康 よくない が 直したい (＜決意＞)

このような、対照的な二つのパターンなので、筆者は他力本願なく希望＞、自力本願なく決意＞と対比して呼んでいるが、神経症者と健常大学生群を年齢を統制して比較してみると両者とも神経症者の方が有意に平均値が高い (小林 1993)。その上、SCT-BとMMPIとの相関*¹では表2のように、臨床尺度では＜決意＞はPt (精神衰弱) 尺度と正相関、D (抑うつ) と正の傾向があった。また、＜希望＞は、Ma (軽そう) 尺度と負相関、D尺度と正の傾向があった。これらの二つの尺度は対比的ではあるが、強迫性や抑うつと関係がありそうである。また、＜決意＞のパターンは他のテストとの相関研究では、P-Fスタディで外罰の障害優位と負相関、集団TATで「社会的承認」と正相関、集団ロールシャッハでKF・Kと相関があった。すなわち、欲求不満場面でも我慢強く文句を言わず、社会的に承認されることを望み高い目標を掲げて努力をするといういい面があるが、その裏には漠然とした不安があり、それが意識に上らないように、強迫的な防衛をすると考えられるのである。

表2 SCT-Bの反応パターンとMMPIの相関

	肯定 否定	肯定 肯定	否定 否定	例外	受容	拒絶	理想 現実	期待 不安	過去 現在	希望	不安	決意	自己	説明	その他
Q	-0.058	0.061	0.024	0.036	0.110	-0.052	0.159 ⁺	0.044 ⁺	0.166	-0.167 ⁺	-0.050	-0.175 ⁺	0.012	-0.053	-0.059
L	-0.090	0.278 ^{**}	0.121	-0.131	-0.058	-0.004	-0.006	0.160 ⁺	-0.047	0.046	0.265 ^{**}	0.086	-0.045	-0.048	0.157 ⁺
F	-0.018	-0.041	0.146	-0.105	0.160 ⁺	0.132	-0.088	0.025	-0.069	-0.041	-0.095	0.023	0.179 ⁺	-0.002	0.027
K	-0.066	0.051	-0.039	0.010	-0.171 ⁺	-0.174 ⁺	0.019	-0.084	-0.057	0.134	0.171 ⁺	0.157 ⁺	-0.056	0.016	0.036
HS	0.039	-0.007	0.056	-0.046	0.164 ⁺	0.075	-0.149	0.132	-0.058	0.121	-0.068	0.063	0.145	-0.111	-0.021
D	-0.187 [*]	0.139	0.081	-0.178	0.066	-0.066	0.001	0.025	0.028	0.164 ⁺	-0.031	0.175 ⁺	0.088	-0.038	0.038
HY	0.087	0.103	-0.000	0.003	0.158 ⁺	0.019	-0.082	0.094	-0.191 [*]	0.102	-0.099	0.126	0.088	-0.171 ⁺	-0.099
PD	-0.070	0.035	-0.035	-0.060	0.037	-0.055	0.050	-0.074	-0.156	0.104	-0.015	0.061	0.068	-0.084	-0.059
MF	0.185 [*]	0.046	0.061	0.057	0.019	-0.088	-0.215 [*]	0.133	0.007	0.033	-0.061	0.131	-0.044	-0.081	-0.008
PA	-0.103	0.024	0.064	0.048	-0.128	0.115	0.056	-0.028	-0.097	0.077	-0.087	-0.044	0.214 [*]	-0.011	0.013
PT	0.022	0.004	0.127	-0.033	0.004	-0.007	-0.125	0.008	-0.072	0.088	-0.043	0.212 [*]	0.210 [*]	-0.108	-0.055
SC	0.024	-0.026	0.138	0.008	0.043	0.111	-0.072	-0.045	-0.090	0.034	-0.042	0.065	0.123	-0.065	-0.083
MA	0.043	0.020	-0.034	0.184 [*]	0.109	0.143	-0.055	0.148	-0.148	-0.195 [*]	-0.064	-0.037	-0.069	0.015	0.007
SI	-0.007	-0.029	0.156 ⁺	-0.158 ⁺	0.048	0.068	-0.004	-0.084	0.105	0.038	-0.046	0.084	0.057	-0.051	0.003

+P<.10 *P<.05 **P<.01

ここで、躁うつ病の病前性格論についての議論を理解するために、笠原 嘉（1976）の論を参照すると、うつ病ないし躁うつ病の病前性格についての議論は古くからあるが、この問題への関心が寄せられる契機になったのは、ドイツのテレンバッハのメランコリー親和型性格の提唱であり、同時期に、下田光造の執着性格論に若干の修正を加えた平沢一の仕事によるところが大きいという。

テレンバッハのメランコリー性格論とは、几帳面性、秩序性に特徴づけられるが、笠原（1976）は補足的に対他的配慮を持った秩序愛だとして、他人との円満な関係の維持に努める性格面も強調した。それは、ただ秩序愛や固執性が強く、他者への配慮を欠く強迫的性格との違いを明確にするためである。また、彼は、当時の精神科外来で、軽症ないし中等度のうつ病が急増し、その増加分のほとんどがメランコリー親和型性格ないしは執着性格を病前性格とするところの单相うつ病であったと指摘している。

このように、躁うつ病の発症には、患者の病前性格が関与していると考えられている。具体的には、下田の言うような几帳面、まじめ、熱中性であったり、テレンバッハ、笠原の言うような几帳面、秩序性、対他的配慮などであろう。これらは、社会的に承認されるようないい成績、業績を得ようと努める向上心や責任感に関係するとともに、強迫的にきっちり手抜きをしないでやらないと取り返しがつかなくなるという不安に、常に駆り立てられている状態とも考えられる。Salzman, L. (1973) が強迫性の由来に関して、外界を支配していないと不安になることを指摘し、健常者の強迫的心性から、強迫神経症、その破綻としてのうつ病や統合失調症にいたる強迫スペクトラムを提唱しているように、強迫性は破綻を防ぐための防衛として有効なのである。また、彼は絶対的コントロールに固執するほど、強迫のパターンが心地よくなり、なかなか抜け出せない安定したものになっていくことを指摘している。

ここで、話を＜決意＞のパターンに戻すが、例えば、「仕事は大変だがこれから働かないといけない」というように前半では困難さや否定面が記述され、後半ではそれを努力でなんとかしようという意志が示されるものが＜決意＞と評定される。ここには、現状への不安や不満とそれを打破してやり遂げようという几帳面さ、熱意がにじみ出ている。

このような反応が多い被検者はメランコリー親和型性格とか執着性格に近い面を持っている人が多いと考えられる。そうすると、SCT-Bの実施において、1ヶ月の間隔を置いて繰り返し実施した場合も、几帳面であり固執する性格の彼らは、記憶をたどりながらなるべく同じ反応をしようとしたことが考えられる。また、多少表現は変わったとしても、彼らの得意な「決意表明」のパターンを確実に繰り返して書いたものと思われる。それは、社会的にも承認されている責任感や熱心さにも通じるものであり、彼らは、その価値観を素直に受け容れているからである。また、強迫的メカニズムから考えてみると、同じことを間違えず繰り返すことにより、彼らは、外界をコントロールできていると感じることができるし、達成感を感じ安心感を得ることになるだろう。

以上のように考えてみると、繰り返す几帳面さからも決意表明する熱心さからも＜決意＞のパターンの多い人は、このパターンに固執することが考えられるし、それは、強迫的メカニズムにも裏打ちされている。このように要因が多重的であったために、飛び抜けて高い相関になったものと考えられる。

6. おわりに

SCT-Bは、前半で一回完成した文章に「が」をつけて再度文章を完成させるという課題である。「が」という接続助詞はこのような状況で使われた時には、前半と反対の面もしくは違う面を書くように規定する力をもつ。それでも、敢えて＜否定否定＞を繰り返したり、後半で自分に関係づけたりする（＜自己＞）のは、その個人のパーソナリティの一側面が反映されているものと考えていいだろう。筆者は様々な他のパーソナリティ・テストとの相関や自験例からSCT-Bの反応パターンの性質を探ってきて、部分的に発表してきたが、この度それをまとめた（小林2005）。その中で、再検査信頼性の部分が未発表だったのでその部分をまとめるとともに、少し考察を深めた。

このSCT-Bは、当然、パーソナリティ・テストの中では投射法に位置づけられるが、課題解決の方法を反応パターンの個人内比率に投射させ、他者の比率と比較評価するという独特のテストである。被検者を葛藤状態におく心理的負荷検査ともいえる。このように「が」を取り込んでもう一つ文章を書くときには、前半書いたものに関連してなおかつ違う事象を連想し、「が」を挟んでもおかしくない文章構成を考えなくてはならない。かなり、高度な認知的課題である。偽る余地も少ないのではないだろうか。

パーソナリティはAllport, G.W. (1937) によれば、「個人の内部で、環境への彼特有な適応を決定するような、精神物理学的体系の力動的機構である。」と定義されている。多くの投射法、作業検査法のパーソナリティ・テストも「環境への彼特有な適応」の一側面をそのテストの平面上にとらえていると考えられる。しかし、今回、再検査信頼性のために二回実施して＜決意＞のパターンでこのような高い相関がでたことは、SCT-Bが、環境への反応の仕方をより直接的でダイナミックに拾い上げているのではないとも考えられる。今後も研究を続けていきたい。

注

- * 1 小林哲郎 (1990 b) に発表したものに加筆修正を加えた。
- * 2 数値は小数点以下 2 桁に丸めてある。
- * 3 <決意>の評定基準には二つの下位分類があり、それをDT-1、DT-2としている。
- * 4 この調査の被検者は大学生115名。MMP Iは素点で計算したのでMf尺度は女性的興味の高さを表す。

参考文献・引用文献

- Allport, G.W. (1937) : *Personality: A Psychological Interpretation*, 詫間武俊他訳 (1982) パーソナリティー心理学的解釈－新曜社.
- 岩原信九郎 (1980) : 新教育統計法 (第38版), 日本文化科学社.
- 笠原 嘉 (1976) : うつ病の病前性格について, 笠原 嘉編, 躁うつ病の精神病理 1, 弘文堂.
- 小林哲郎 (1985a) : SCT-Bの評定について. 金沢美術工芸大学学報, 第29号, p.35-44.
- 小林哲郎 (1990b) : 文章完成法の新しい応用 (SCT-B) の試み, 心理学研究 61, p.347-350.
- 小林哲郎 (1993) : SCT-Bの臨床への適用. 心理臨床学研究, Vol.11, No.2, p.144-151.
- 小林哲郎 (2005) : 文章完成法を応用したテストSCT-Bについて, 京都大学教育学研究科博士論文.
- Loevinger, J. & Wessler, R. (1970) : *Measuring Ego Development* 1, Jossey-Bass Publishers.
- Redmore & Waldman (1975) : Reliability of a sentence completion method of ego development. *J. of Pers. Assess.*, Vol.39, 236-243.
- Salzman, L. (1973) : *The Obsessive Personality*, 成田善弘・笠原嘉訳 (1985) : 強迫パーソナリティ, みすず書房.